

ベトナム人日本語学習者による無声化した[sɥi]の知覚の傾向

井上 正子

1. はじめに

2011年以降、増加傾向のベトナム人留学生（表1）および日本語学習者に対する日本語の発音指導には課題が多い。小河原（1997）も、教師による学習者に必要な発音指導は何かを的確に把握する必要があるとしながら、実際の教育現場への具体的な応用は不十分だと問題提起している。

今回着目した母音が無声化した[sɥi]とは、文末の「～です」「～ます」の下線部分をはじめ「テスト」「レストラン」「アスピリン」など外来語などによくあらわれる音であり、2014年から始まった日・ベトナム経済連携協定の規定による看護師・介護福祉士候補者受け入れで来日した日本語学習者にとっては、医療語彙など難易度が上がる語彙も習得することをふまえると、たかが[sɥi]といえども知覚の可否は問題になりうるだろう。また、日本での就職や日系企業への就職を考慮した場合も丁寧さを表現するスタイルマーカの「～です」「～ます」「～ですか」「～ますか」の発音すらまもらないと日本語力の表は実力を下回り、残念な結果として評価されることが考えられる。日本語教師として、そのような結果は本意であり不甲斐なく感じる瞬間である。

そこで、ベトナム人日本語学習者（以下、ベトナム人学習者）にとって[sɥi]の知覚が困難であるために日本語の産出も困難となるのではないかという観点にたち、具体的な発音指導・練習方法を検討するためにも、ベトナム人学習者による日本語の母音が無声化する音の知覚、特に[sɥi]の傾向を探ることとした。

表1 出身国（地域）別留学生数上位5位¹

出身国（地域）	留学生数	前年比
中国	81,884人	-4,440人 -5.1%
韓国	15,304人	-1,347人 -8.1%
ベトナム	6,290人	1,919人 43.8%
台湾	4,719人	102人 2.2%
ネパール	3,188人	737人 30.1%

H25年5月1日現在

¹ 独立行政法人日本学生支援機構「平成25年度外国人留学生状況調査結果より
http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data13.html

2. 先行研究及び本研究の課題

ベトナム人学習者の発音に関する研究は、留学生の増加に伴い進みつつある。しかし、学習者自身が4技能の中で最も苦手とあげている聴解に関する研究は少なく無声化した音の脱落に関するものは管見の範疇にはなかった。

ベトナム人学習者の知覚に関する研究は、ザ行・ジャ行・ヤ行音の聞き分けの傾向を明かした研究（ファム 2006）アクセントが長音と促音の聞き取りへの影響を明らかにした（Ngan 2012）などの研究があり、聴取が困難であるために産出も難しいと指摘している。このことから、筆者は単音をはじめ発音練習や聞き取りの学習時間が少なく教師からの指摘や指導がないと、ベトナム人学習者の中には自身の発音の誤りに気づかないまま日本語学習が進み、誤った発音のまま定着してしまうことを恐れている。

筆者も日本語学習の早期段階での発音指導と聴解練習は、日本語の発音を誤って認識して定着させないために必要であると考えている。そこで日本語の特徴のひとつである母音の無声化した音[sɥ]の産出が困難だとみられるベトナム人学習者がどのくらい存在するのか調査を実施したところ、知覚に難があるために産出にも影響を与えてしまうとみえた調査協力者がいたこと、加えて、管見の限り母音が無声化した[sɥ]に着目した知覚調査の研究がなかったことから本調査を実施することとした。

3. 本研究の目的

ベトナム人学習者の中には日本語の発音の特徴のひとつである母音の無声化が生じた「す」つまり[sɥ]（以下、[sɥ]）の産出が困難な学習者がいる。このようなベトナム人学習者の[sɥ]の発音の特徴は、ベトナム人学習者としては[sɥ]を産出しているにも関わらず、日本語母語話者にとっては文末に限らず語中においてもまるで音が脱落してしまったように感じ、聴取できないことがあるほど不明瞭な[sɥ]である。つまり、[sɥ]の発音が困難なベトナム人学習者は[sɥ]を発音しているつもりであっても、聞き手に伝わらない発音である。母音が無声化する音は、/k, s, t, h, p/の無声子音に挟まれた母音/i, u/も母音の無声化が生じるので文末の「～です」「～ます」の他に「～でした」「～ました」や「テスト」「レストラン」のような語彙の中にも存在する音である。よって「～ですか」「～でした」、語彙では「テスト」「レストラン」の下線部分も無声化する音であり、ベトナム人学習者による産出が困難な音のひとつである。

そこで本研究では、これらの母音が無声化した音の産出が困難となる原因は[sɥ]の知覚が困難なのではないかと考え、丁寧さをあらわすスタイルマーカースで使用頻度が高い文末の「です」「ます」の[sɥ]に着目し、[sɥ]の前にくる音の違いによって文末の[sɥ]が知覚できないのかなど、ディクテーション形式で知覚調査を実施しベトナム人学習者の[sɥ]に対する知覚の傾向を探ることが目的である。

4. 調査概要

滞日ベトナム人日本語学習者 24名 (男性 16名 女性 8名) を対象に次のような調査を実施した。調査協力者は、日本語学習開始後6ヶ月から2年までの日本語学習歴で、学習環境は日本語学校または、日本母語話者によるボランティア教室である。

知覚調査課題に用いた調査語は、第1拍目に拗音以外の清音・濁音・半濁音、第2拍目に[sɥ]を配置した2拍の語である。2拍音の67語と音に対する慣れによって聴取の偏りが生じないようにダミー語を10語加え77語の調査語を設けた。また、現代日本語では存在しない音(表2 No. 14及びNo. 15の網掛け部分)及び四つ仮名の「ぢ・づ」は除外した。(表2 No. 7の網掛け部分)本調査において語中の「す」[sɥ]に関しては調査しない。調査語の音声はダミー語を含め11語を1つのファイルとして、7つの音声ファイルを作成した。ダミー語には、表2のNo. 16とNo. 17の10語を設けた。

表2 調査語リスト

No.	あ段	い段	う段	え段	お段
1	あす	いす	うす	えす	おす
2	かす	きす	くす	けす	こす
3	がす	ぎす	ぐす	げす	ごす
4	さす	しす	すす	せす	そす
5	ざす	じす	ずす	ぜす	ぞす
6	たす	ちす	つす	てす	とす
7	だす			です	どす
8	なす	にす	ぬす	ねす	のす
9	はす	ひす	ふす	へす	ほす
10	ばす	びす	ぶす	べす	ぼす
11	ぱす	ぴす	ぷす	ぺす	ぽす
12	ます	みす	むす	めす	もす
13	やす		ゆす		よす
14	らす	りす	るす	れす	ろす
15	わす				
16	くた	まし	てう	なれ	みお
17	たく	しま	うて	れな	おみ

No. 16 及び No. 17 はダミー語

4. 1 調査手順

1) 調査用音声を聞く。

日本語母語話者（東京出身・アナウンス専門学校卒業した女性）によって調査語を録音した音声を聞く。調査語の音声は1語につき2回再生され、間に2秒の無音を挟み、調査語と調査語の間は5秒の無音を挟んだ。母音の無声化が生じる[su]の発音がしやすいように頭高型のアクセントで産出し録音を行う。調査前にICレコーダーで録音²する。調査語音声はExcelのRAND関数にて無作為の順番に並び替え、再生する。

2) ディクテーションを実施する。

ディクテーションは、ひらがな・カタカナ・ローマ字のいずれかを用いて行い、文字は混在してもかまわないとした。これは、調査語と調査語の間に挟んだ無音時間が5秒間だったこともあり、文字の正確さより知覚した音が何であったかを重視したかったからである。また、音の存在はあるがどのように表記したらいいかわからない、もしくは2回の音声再生では知覚できなかった場合は「？」で表記することとした。例えば、1拍目は知覚できたが2拍目が知覚できなかった場合は「あ？」のように表記することとした。さらに、知覚不可の場合は無回答でよいとして、ディクテーションの回答方法には柔軟な対応をもって実施することとした。また、調査時はヘッドフォンを使用し極力音声に集中できるように配慮した。

調査方法等の説明は、漢字にひらがなのルビが付与された日本語の説明にベトナム語訳を添えて提示した。音声ファイルは7つあり、1つずつ再生した。音声ファイルのディクテーションを1つ行うたびに2分の休止を設け、調査協力者に次のファイルの再生開始のタイミングを指示してもらい、極力、調査による負荷の軽減も図った。

3) ディクテーションによる回答を分類する。

ディクテーションを実施した後、回答の内容を調査語別に正誤を仕分けする。さらに、誤答の内容がどのようなものなのか分類する。

- ① 1拍音として回答
- ② 2拍音として回答し、2拍目を促音表記の「っ」と回答
- ③ 2拍音として回答し、2拍目を「つ」と回答
- ④ 2拍音として回答し、2拍目を「っ」または「つ」以外の回答
- ⑤ 3拍音として回答し、3拍目を「つ」と回答
- ⑥ 3拍音として回答し、3拍目を「っ」または「つ」以外回答
- ⑦ その他

² 録音機器：OLYMPUS Voice-Trek VN-8100PC mp3ファイル128kbpsにて録音。

④⑥には、「?」と表記した回答も含む。⑦は、誤答の内容が①～⑥に該当しない少数のものである。

5. 結果と考察

5. 1 母音が無声化した[sɥj]の知覚の困難さ

この調査は、日本語の特徴にある母音の無声化の中から[sɥj]に着目し、知覚の傾向を観察した結果、次のような傾向がみられた。

調査語 77 語のうち、ダミーの 10 語を除いた 67 語に関して、語末の[sɥj]が知覚できなかった語は(誤答を含む)平均が 50%以上であった。一方、24 名の調査協力者のうち 7 名のベトナム人学習者においては 80%以上語末の[sɥj]を知覚することが可能であった。したがって、ベトナム人学習者の約半数の学習者にとって [sɥj]の知覚が難しいという結果がでた。この調査でもっとも、誤答率が高かった調査協力者の誤答の内容は、[sɥj]が知覚できないばかりではなかった。誤答の内容は次のとおりであった。

- A. [sɥj]が全く知覚できなく語頭の 1 拍目の音のみ回答する
- B. 2 拍目の音を「す」ではなく「つ」と回答する
- C. 2 拍目の音を「っ」と促音表記で回答する
- D. 2 拍音の語構成であるのに 3 拍音と捉え 2 拍目と 3 拍目を「つつ」と回答する

このように協力者は 4 種の傾向にわかれた。これらの回答の内容には、[sɥj]が知覚困難とはいえ他の音と聞き間違えている回答があり、単に知覚できないだけではなかった。また、ダミー語以外の全ての調査語の語末が[sɥj]であると回答できた正答率が高い学習者であっても、大半を 3 拍音と捉え 2 拍目と 3 拍目を「つつ」と回答し 2 拍音の語として知覚できなかった。この結果から、ベトナム人学習者の半数は 2 拍音の語で母音が無声化した[sɥj]の知覚が難しいようであり、拍を正しく捉えることも難しいと考えられる。

知覚の誤りの傾向として、ベトナム人学習者 8 名のうち 4 名は誤答が 90%以上であり、誤答の内容は A の[sɥj]が全く知覚できなく語頭の 1 拍目の音のみ回答するものであった。次に、3 名は誤答の内容が C の 2 拍目の音を「っ」と促音の表記で回答し、3 番目に 2 拍目の音を「ん」とディクテーションの回答としていた。誤答の内容 B. 2 拍目の音を「す」ではなく「つ」と回答するものと、D. 2 拍音の語構成であるのに 3 拍音と捉え 2 拍目と 3 拍目を「つつ」と回答するものは誤答が混合していて、B による影響なのか D による影響なのかまでは現段階では断定できなかった。

以上の結果から、ベトナム人学習者の中には[sɥj]の音を誤って知覚をしてしまう可能性があるといえるだろう。つまり、母音の無声化が生じた音[sɥj]を含むある語を聞

いたときに[sɥj]を知覚できないまま誤って語彙を記録してしまう、または語彙を誤って覚えてしまうことも考えられる。例えば、正しく知覚できないために辞書などで語彙が調べられないこともあるわけである。これらは、ベトナム人学習者自身が知覚できなかったことに気づいていないことも考えられる。

ディクテーションの回答で、もっとも[sɥj]の知覚が困難だった語は、調査語 67 語のうち「ふす」「つす」「しす」「じす」であり、以上の調査語の 2 拍目の音を知覚することが難しかったようである。そこで、全回答の中から誤った音で知覚したものを集計すると、先にあげた 4 つの調査語の誤答率は 70%以上であった。(表 3)

表 3 調査語の知覚

調査語	知覚不可
ふす	75%
つす	71%
しす	71%
じす	71%

調査語「ふす」においては、調査協力者 24 名中 18 名 75%が[sɥj]を知覚することができず、もっとも多かった誤りは A の 1 拍目の「ふ」のみを回答したものが 13 名で 54%と[sɥj]を知覚できないという誤りの大半を占めた。2 番目に多かった「つす」では、1 拍目の音も知覚に誤りがあったのが 13 名おり、1 拍目の音の知覚が難しかったためなのか [sɥj]を知覚できなかったが 17 名だった。「ふす」と「つす」の誤答の内容は異なるものだった。しかし、「ふす」も「つす」も 1 拍目は無声音+/u/の音構成であったが [sɥj]の知覚に対する 1 拍目による影響が異なることから、摩擦音である場合と破裂音である場合による影響によって知覚の困難さが異なったといえる。また、調査語を 1 拍音と知覚した回答に「つ」「ず」「じゅ」があり、「つつ」が 3 名、「つつ」「じゅつ」「つう」と 2 拍音と捉えられた回答でも 1 拍目の音の影響を受けたためか[sɥj]が知覚できなかった。これらの他には、1 拍音だとしながら音が何か回答できなかったベトナム人学習者が 6 名もいた。同じく 17 名が知覚できなかった「しす」は、1 拍目の「し」のみを回答したものが 8 名 24%いた。次に「しっ」5 名「しつ」が 2 名と A の 1 拍目のみ知覚する誤答に B の 2 拍目を「つ」とするもの C の 2 拍目を「っ」とする誤答が混合した回答であった。そして、「じす」は、A の 1 拍目のみ知覚する誤答が 7 名と C の 2 拍目を「っ」とする誤答が 6 名でその回答の中には「じ」を「り」と知覚したものの「じっ」「りっ」という誤りもあった。さらに、B の 2 拍目を「つ」とする「じつ」と誤ったものもあった。しかし、ここまでの誤りの傾向として D の 3 拍音と捉え 2 拍目と 3 拍目を「つつ」とした回答はなかった。調査語「ふす」以外は 1 拍目の音の誤りもみられた。さらに調査協力者の中には[sɥj]にあたる 2 拍目の音を聴取しているも

の[sɰi]ではなく、無声摩擦音[t]と捉え閉音節の語と知覚したのか、ディクテーションの回答として促音をともなった「ふっ」または「しっ」と回答した。そして、無声破擦音[ts]と捉えた調査協力者は[sɰi]を[tsɰ]と交替し「ふっ」「しっ」と回答していた。

このように、第1拍目だけの回答が6名以上(調査協力者の25%以上)だった調査語は「ふす」「しす」「むす」「くす」「はす」「すす」の67語中6語あり1拍目の音は知覚できたが[sɰi]はできなかつた調査協力者がいた。「ふす」「しす」「むす」「くす」「はす」「すす」の1拍目の音は無声子音ではじまる音である。このことから、1拍目の音が無声音・有声音の違いによって[sɰi]の知覚の可能・不可能があるわけではないが無声音が2つ以上続くとより知覚が困難になると考えられる。

反対に、[sɰi]の知覚で一番誤答が少なく知覚不可の割合が25%と低かつたのは「なす」の1語であった。しかし、この調査語においても2拍目の[sɰi]と知覚できていながらも先行母音と[sɰi]の間に[s]も知覚したようにディクテーションの回答を「なっす」と書いたベトナム人学習者が2名おり、「まっす」または「ます」のように[sɰi]の知覚が可能であっても「な」を「ま」と1拍目を表記した調査協力者も5名いた。但し、本調査では語末[sɰi]の知覚の可否をみたので、第1拍目の誤答は対象としていない。

今回、調査協力者のうち誤答率が90%以上のベトナム人学習者は24名中8名で、そのうち、全く知覚できなかつた誤答率100%の調査協力者が3名いた。一方、全調査語の[sɰi]を知覚した調査協力者は1名であった。また、調査協力者のうち[sɰi]の知覚正答率、つまり[sɰi]の知覚可能だった割合が90%以上だったのは5名だった。この調査に協力してくれたベトナム人学習者24名の日本語学習歴は6ヶ月から2年までと差があり、学習歴により[sɰi]の知覚の差があるのかも観察したが、誤答率0%の調査協力者は学習歴1年3ヶ月であり、誤答率100%の調査協力者は9ヶ月が1名・2年が2名であったことから学習歴による差はないと判断した。

全調査語の[sɰi]を知覚することが可能だった調査協力者は、来日前にベトナムで日本語を学習した際に、文末の「す」の母音が無声化することと教えられていたため「す」には[ɰ]と[sɰi]があることを知識としてもっていた。また、この調査協力者は[sɰi]の知覚より日本語のアクセントのほうが難しいとこたえており、アルバイト先で接する日本人の発音にも、注意深く発音を聞いていることから積極的に日本語の発音を意識しているようである。しかし、今回の調査においてこの調査協力者の回答の大半は2拍目に「っ」を挟んで3拍目に「す」とした回答が約93%で、「～っす」と書いた回答が多かつた。

5. 2 母音が無声化した[sɰi]を語末にする語彙の知覚傾向

先にあげた誤答の内容は大きくわけて4種類あり、A. [sɰi]が全く知覚できなく語頭

の1拍目の音のみ回答するもの、B.2拍目の音を「す」ではなく「つ」と回答するもの、C.2拍目の音を「っ」と促音表記で回答するもの、D.2拍音の語構成であるのに3拍音と捉え2拍目と3拍目を「つつ」と回答するものである。A. [sɥ]が全く知覚できなく語頭の1拍目の音のみの回答が多かった調査語は「ふす」の13名54%と半数以上が2拍目を捉えていなかった。次に「しす」8名33%「くす」「すす」「はす」「むす」が各6名25%の調査協力者にとって[sɥ]が全く知覚できなかった。

調査協力者のベトナム人学習者の誤答は、[sɥ]が知覚困難であるばかりではなく、[sɥ]の知覚の可否の傾向は、音の配列によって異なり無声音が2つ並ぶと困難であった。[sɥ]を知覚したものの正答ではなかった調査協力者のディクテーションの回答は3拍音の語と捉え、例えば「あす」を「あっす」と回答したものが多かった。4. 1調査手順の3) ディクテーションによる回答を分類の②は2拍音とし2拍目を「す」であるところを「っ」と回答し例えば「あっ」としたものがあつたが、3拍音の語と捉えた回答の中には3拍目に促音表記の「っ」となる「あすっ」のような回答は1つも無かった。

ディクテーションの回答で正答数が一番多かった調査語は「うす」で、[sɥ]の知覚可能だったベトナム人学習者は24名中16名で、そのうち12名が「うす」と回答したが「うっす」と回答した人数も4名いた。今回、母音が無声化した「す」つまり[sɥ]に着目した理由に、丁寧さを表現する「です」「ます」の[sɥ]が発音できないベトナム人学習者に会ったことにある。文を作成する時の文末表現として「です」は、日本語学習において最初に学習する助動詞であり使用頻度も高いのに、知覚も産出も容易ではなかった。調査語「です」の回答を観察すると24名中[sɥ]が知覚できた調査協力者は14名であり、そのうち、「です」と回答した正答者は9名であった。「ます」の場合は24名中[sɥ]が知覚できた調査協力者は14名で「ます」と回答した正答者が11名と「です」よりも聞き易いようである。また、「れす」を「です」とした回答が13名そして「べす」を「です」とした回答が5名と聞き間違えたことから「で」「れ」「べ」が混同してしまう点にも注意が必要である。この結果から考えられることは、ベトナム人の調査協力者の学習歴から判断して、「です」「ます」は習得されているにもかかわらず、「です」「ます」2拍音として聞いた場合は[sɥ]の知覚は困難だということだといえる。すると、文章として語彙の羅列があれば文末の「です」あるいは「ます」と推測でき音の知覚の可否とは異なると考える。したがって、固有名詞など語彙の意味を知らない場合は誤ってしまうことがあり、特に医療・介護に従事する日本語学習者であれば職務上の大きな弊害になる。

本調査に協力してくれたベトナム人学習者にとって、調査語の中で[sɥ]を知覚する

ことが容易な調査語があっても正しくディクテーションができた調査協力者は少なかった。これらのことから、先行研究の調査でもあげられていたように日本語教育の4技能といわれている「読む」「書く」「聞く」「話す」の中で「聞く」がもっとも苦手であることを表わしているともいえる。また、今回の調査を実施するにあたり事前アンケートの回答にも一様に「テストなどでも聞き取り／聴解は難しい」「特に“つ”が難しく“つ”は話すときの発音も難しい」とあり、「す」は難しくないと考えていたが[sɰj]は意外と聞けなかったことに驚いていた。また、[sɰj]が知覚できていなかったことをフィードバックした際、[sɰj]だと思わなかった、音が全く聞けなかったという調査協力者もいた。「す」を知覚するのは容易だとしながら[sɰ]と[sɰj]の違いを知らなかったために[sɰ]と[sɰj]の区別への意識はしていなかったといえる。

6. まとめと今後の課題

ベトナム語は閉音節を持つ言語であり、ベトナム語の音韻体系には末子音が存在する。ベトナム語には、末子音に[-s]はないことから、文末や語末にくる[sɰ]または母音が無声化する[sɰj]は知覚が困難な音ということだと推測できる。しかし、ベトナム人学習者にとって[sɰj]は知覚できないわけではなく、音の配列など環境によって知覚は可能であり、さらに拍を捉えることができると知覚できるようになると考えられる。本調査の結果から、ディクテーションの正答である2拍目を「す」とする部分が「っ」または「つ」としたものが散見でき、3拍音として回答した中にも同様の誤りが多くみられた。調査協力者がこのような回答に至った背景にはベトナム語の音韻体系によるものだと考える。ベトナム語には、末子音に[-s]はないが[-t]があり母語の影響からベトナム語の音配列規則に則って日本語表記でより近いものとして「っ」または「つ」と回答したものではないだろうか。しかし、この回答に関して調査語の音声がどのように聞こえたのか知覚を問うただけであり、ベトナム語の音韻体系にまでおよんで回答の理由はインタビューしていないため母語の影響によるものであることは筆者の推測の域で留まっているため、今後、調査方法等を再検討したい。

本研究において、母音が無声化した「す」つまり [sɰj]の知覚が可能であることを正答とし調査協力者の回答を観察したが、正答率が高かった調査語「なす」でも正答率は75%であり、次は「ぶす」で正答率は71%だった、この2つの調査語は正答率が高いといえ20%以上の誤答があるほど[sɰj]の知覚はベトナム人学習者にとって難しい。この[sɰj]を知覚するには、ベトナム人学習者自身が[sɰ]と[sɰj]が区別できなければならない。したがって、[sɰ]と[sɰj]を区別して知覚できるように聴解練習に単音レベルの練習も必要であり、違いを指導する必要もあると考える。これは、[sɰ]と[sɰj]の組み合わせ

に限らないだろう。さらに、来日前ベトナムで日本語を学習したときに、文末の「す」は母音が無声化することを教えられていた調査協力者は、[s̥] と[s̺]の違いを知識としてもっていたことから[s̺]の知覚に困難さを感じていなかった。つまり、日本語学習の早期段階で「す」には[s̥]と[s̺]の音の存在を教えることが有効であるといえる。

最後に、本調査の目的である[s̺]の知覚の傾向ではないが、調査協力者の全回答を観察すると[s̺]の知覚以外にも気になる点が散見された。その中のひとつに、調査語「です」の回答から1拍目の音だけ注目して観察すると「で」を「べ」と聞き間違える傾向が9名と高かった。先に述べたとおり「れす」や「べす」を「です」と回答した調査協力者が少なくなかったことから、「で」と「べ」と「れ」は混同しやすいといえる。これは「で」をベトナム語であらわすと *dê* または *de* であり *d* は[d̥]と発音する。このときに舌がやや後退することからベトナム語の母音の影響を受けて日本語の「で」「れ」「べ」の音は、[d̥]と発音したときと類似した音に知覚して混同してしまうと考えられる。同様に、「ぞ」を「よ」「じょ」、「ざ」を「じゃ」「や」、「つ」を「ちゅ」「ず」「じゅ」、「ぬ」を「む」など知覚が困難な音は無声化したものに限らない。

また、ベトナム人学習者による日本語の知覚に関する研究、特に母音が無声化した音に関する研究は管見の限り少ないので、調査考察を続けベトナム人学習者における知覚と産出の両面から授業案等の研究をすすめたい。

参考文献

- 天沼寧・大坪一夫・水谷修 (2004) 『日本語音声学』くろしお出版
- 小河原義朗 (1997) 「日本語発音学習における学習者の自己評価」『言語科学論集』第1号 p27-38
- 金村久美 (1999) 「ベトナム語母語話者による日本語の発音の音調上の特徴」『ことばの科学第12号』名古屋大学文化言語文化研究会 p73-92
- 清水政明・Nguyễn Thị Ái Tiên (2012) 『ベトナム語中級発音・文法解説』アジアアフリカ語文化研究所主催ベトナム語中級講座資料
- 社団法人日本語教育学会 (2005) 『新版日本語教育事典』大修館書店
- ファム・トゥー・フォン (2006) 「ベトナム語母語話者による日本語のザ行音・ジャ行音・ヤ行音の聞き分け」『日本言語文化研究会論集』2006年第2号 p83-108
- Do Hoang Ngan (2012) 「長音・促音の聞きとりと与える長音の位置・アクセントの影響—日本語を専攻とするベトナム人学生を対象に—」『VNU Journal of Science, Foreign languages 28』 p242-254

(いのうえ しょうこ・芝浦工業大学)